

小特集「日本・朝鮮近世の文学における「医者」表現」：日本・朝鮮近世の文学における「医者」表現

小林, ふみ子 / KOBAYASHI, Fumiko

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

256(3)

(終了ページ / End Page)

256(3)

(発行年 / Year)

2020-03-25

日本・朝鮮近世の文学における「医者」表現

小林 ふみ子

朝鮮も日本も、古くより中国における医学の発達に学び、それぞれに医術を発達させてきた。さらに日本では一七世紀の朝鮮の医学書『東医宝鑑』が大きく受容されたように、この世界における東アジア三国のつながりは深い。

ところが、それを描く文学作品となると、その取りあげ方、焦点の当て方に大きな相違が見られるという。そのことを、日本近世文学研究を端緒として韓半島文芸と日本文芸の比較研究をされている高永爛氏（全北大学校）に報告いただき、その相違の由来を探るべく、二〇一九年二月に研究会を開催した。そこでディスカッションとして迎えたのが日本近世文学における医学書の受容や医者をめぐる小説について研究されている福田安典氏（日本女子大学）、吉丸雄哉氏（三重大学）のお二人であった。本特集は、そのときの対話をもとにそれぞれに書き下ろしていただいたものである。

これら三本の論考によって、あらためて両国における医学をめぐる状況、つまり王朝や幕府・諸藩との関係、知識や技術といった医療の質の管理、そして医師の自意識の相違、さらに文芸のあり方、すなわち担い手や読者層に由来する性質といった諸相の違いが浮かびあがったといえるのではなからうか。あらためてご寄稿くださった三氏に感謝申し上げます。